

教える！ 浄土 真宗

「浄土真宗」という宗名(1)



行信教校講師
藤澤 信照
ふじさわ しんしょう

はじめに

今回から浄土真宗のみ教えについて体系的にお話する機会をいただくことになりました。そこで、かつて私が行信仏教学院(大阪府高槻市)に入学した1981(昭和56)年に、梯實圓和上(1927〜2014)からお聞かせいただいた「真宗要論」の講義をもとに、お話ししていきたいと思っています。

当時、梯和上の「真宗要論」の講義は、

に書き記します。そして、1年間の講義が終了する頃には、『真宗要論』という一冊のテキストに仕上がっていました。

ちなみに、現在、行信仏教学院の「真宗要論」の講義では、この講義録をテキストとして用いています。いま当時を振り返ってみても、梯和上の博覧強記ぶりは驚くべきもので、私にはとても真似できませんが、読者の皆さんにとって、この連載が浄土真宗の教えの深さに触れ、さらに一歩進んで『教行信証』を読んでみたい、と思うきっかけになればと思います。

「浄土真宗」という宗名について

浄土真宗の教えについて学ぶ第一歩として、まずはじめに親鸞聖人が「浄土真宗」という名によってあらわそうとされている

親鸞聖人の主著である『顕浄土真実教行証文類』(『教行信証』)にあらわされた法義としての「浄土真宗」について、『教行信証』の次第にそって、「真実教」とは何か、「真実行」とは何かというように、教・行・信・証という順序で進んでいきました。これは、真宗要論の講義としては、それまであまり例のない講義の仕方であったと思います。また、梯和上はまったくテキストなどを用いられない、すべて口述筆記の講義でした。私たち学生はひたすら和上の口述をノート

意義をうかがってみようと思います。
一般の人々の中には、「浄土真宗」とは一つの宗派名である、と思っておられる方も多いのではないのでしょうか。しかし、親鸞聖人が「浄土真宗」という名称を使われるときは、教法のことを指していました。親鸞聖人は『教行信証』において、自身の依りどころとする教えを「浄土真宗」と名づけておられるのですが、それは言い方を変えると、「浄土真宗」とはどのような教義体系をもつ教えなのかを明らかにされたのが『教行信証』である、ともいえるのです。

そこで、親鸞聖人が「浄土真宗」という宗名をどのような意味として用いておられるかを、聖人の著書の上からうかがってみると、一つには「浄土宗の真実義」、二つ

には「浄土より顕れた真実の教え」、三つには「浄土を願わしめる真実の教え」という意味があることがわかります。

① 浄土宗の真実義

まず「浄土宗の真実義」とは、親鸞聖人の師である法然聖人が開かれた「浄土宗」の真実義、という意味です。

『親鸞聖人御消息』第一通に、

浄土宗のなかに真あり、仮あり。真といふは選択本願なり。仮といふは定散二善なり。選択本願は浄土真宗なり、定散二善は方便仮門なり。

(註釈版聖典737ページ)

とあります。

ここでいう「浄土宗」とは、いわゆる「浄土宗鎮西派」とか「浄土宗西山派」といっ

た、宗派としての浄土宗のことではありませぬ。

浄土の教えは奈良時代や平安時代においてもありましたが、法相宗や天台宗、あるいは真言宗など、いわゆる聖道諸宗の教えの寓宗(片隅の教え)と位置づけられ、一宗としては認められていませんでした。

しかし、平安末期に出られた法然聖人(1133〜1212)は、長年の求道の末、中国の善導大師が明らかにしてくださった浄土の教えに出会い、『選択本願念仏集』を著して、「浄土宗」という一宗の立教開宗を宣言されたのです。それは、阿弥陀仏の本願力によって浄土に往生してさとりを開くという教えは、自力の修行によって、煩惱を断じ、この土でさとりを開くことを目指す聖道門とは、教えの構造が全く異なるように、親鸞聖人にとって「浄土宗」と「浄土真宗」とは同じ教えのことでした。なお、このご和讃には、「浄土真宗」を開かれたのは源空(法然)聖人であるといわれているのですが、このことの真意については、後にまた詳しくお話ししたいと思います。

選択本願のべたまふ (同595ページ)

っているということを明らかにするためにしました。

親鸞聖人はこれを承けつつ、往生浄土の教えである「浄土宗」の中に、真実他力の教えと方便自力の教えがあることを見極められ、法然聖人が「浄土宗」と名づけられた教えとは、選択本願(第十八願)の教え、すなわち真実他力の往生浄土の教えである、ということを明らかにするために、これに「真」の一字を加えて「浄土真宗」と名づけられたのです。

一般に、「浄土宗」と「浄土真宗」は異なった教えのように考えられていますが、『高僧和讃』『源空讃』に、

智慧光のちからより
本師源空あらはれて
浄土真宗をひらきつつ

② 浄土より顕れた真実の教え

次に、「浄土より顕れた真実の教え」とは、さとりの世界である浄土から、迷いの世界にその徳があらわれた真実の教え、という意味です。

『教行信証』の「教文類」に、
つつしんで浄土真宗を案ずるに、二種の回向あり。一つには往相、二つには

還相なり。往相の回向について真実の教行信証あり。(註釈版聖典135頁)とあり、また『浄土文類聚鈔』には、本願力の回向に二種の相あり。一つには往相、二つには還相なり。

(同478頁)

とあります。この二つの文によれば、「浄土真宗」と「本願力回向」とは同じことを指していることがわかります。

「回向」という言葉にはいろいろな意味がありますが、ここでは「回轉趣向」ということで、「回施」ともいいます。すなわち、さとり浄土の徳が、方向を転じて、迷いの世界にいる私たちに施される、ということです。つまり、「浄土真宗」とは、その内容からいえば、浄土から回向されるものからとして、往相(往生浄土の相)往生成

言でいえば「南無阿弥陀仏」である、ともいえるのです。

③ 浄土を願わしめる真実の教え

また、「浄土を願わしめる真実の教え」とは、この教えを信受し、行ずる者を、往生浄土を願う身に育てあげ、さとりに導く教え、という意味です。

『唯信鈔文意』には、

真実信心をうれば実報土に生るとをしへたまへるを、浄土真宗の正意とすとしるべしとなり。

(註釈版聖典707頁)

とあります。「実報土」とは、阿弥陀仏の誓願に報いて完成された真実の浄土ということで、この浄土に往生すれば、ただちに仏のさとりを開くということです。これを往

仏の因果)・還相(還来穢国の相)衆生救済のはたらき)の二つがあるといわれるのです。この場合の「浄土」とは、真実の教・行・信・証を回施する根源なのです。先哲はこのような「浄土真宗」という教えの一面を「正覚撰化門」とよんでいます。

たとえば、蛇口の銚をひねると水が出るのは、水源から蛇口まで、もつすでに水が届いて、蛇口から出ようとしているからです。そのように、「南無阿弥陀仏」というお念仏の聲が、いま私の口から出ているということは、浄土の徳すべてが、「南無阿弥陀仏」という私をよびたもう声となつてこの身に届き、躍動しているということです。この親鸞聖人の念仏観であり、その根源としての浄土観なのです。その意味で、「浄土真宗」ということを一

生即成仏といえます。「真実信心をうれば」とは、②の「浄土より顕れた真実の教え」をはからいなく聞き入れ、必ず浄土に往生できると信知し、念仏申す身となったならば、ということです。そして、この人はやがて浄土に往生せしめられ、仏のさとりを開かしめられるのである、ということをしてこの文はあらわしています。

この場合の「浄土」とは、そこに往生してさとりを開く世界ということになります。先哲はこのような「浄土真宗」という教えの一面を「往生浄土門」とよんでいます。

今回は、親鸞聖人が「浄土真宗」という名によってあらわそうとされた教えとは、具体的に何を指しているのかを、親鸞聖人のお言葉によってうかがってみたいと思います。